

# 釣りの秘訣VI(最終回)

## 釣りの歴史・・・②

### 趣味

#### 浜田広信(植田)

もう一つ土佐で発明された文化がある。それは土佐のハイカラ釣りである。元は紀州の漁夫が鯛釣りにテント針と称していたものである。テント針は鉛と針を寄せ合い釣っていたものを、土佐では針と錘を一体となし、中に穴を開けそれにハリスを輪にして差し込む。便利であり、常に針先が上に向き海底の雑物に掛からないようにできており、土佐のハイカラ釣りで通っている。加えてナイロンの細い糸の出現で更に生きてきたのである。



次にボラ釣りの仕掛けにだんごの吸い込みである。これは昭和十三年ころに労働運動の権威者安芸盛氏が県外から取り入れ県内に広めたもので、自分も職業柄常に交際しており直接教わったもので、これまたギリ竿の穴戸直馬氏と同様、後世に名を残したものである。近年は船外機が出来て、へばの漕ぎ手には非常に便利であるが、経費を要さない帆を利用するのも得策である。天気の良い朝は山手といつて北から風が吹き、午後はませといつて南風が吹く。それを利用してすればおもしろいし楽である。浦戸湾にはウナギも相当多かった。ところが近年、養殖用にシラス(幼魚)取りが多いので減少した。ウナギは舟を動かぬようにして青柳橋付近で釣れる。それは万葉の昔から夏やせに効果があるとして薬になつてゐる。大伴家持は「石麻呂にわれもの申す夏瘦せによしと云ううなぎとりめせ」土用

の土の日に限らん。魚の目には涙腺がないので涙が出ない(浦原稔治博士)。ところが芭蕉は「逝く春や鳥啼き魚の眼は泪」と詠んでいる。それは科学的でなく逝く春を惜しんで感傷的の句にすぎない。

最後はハゼだ。浦戸湾には相当多い。釣り時は晩秋。河口の潮混じりの所で釣れる。釣るにはおもしろくないが、釣った後には白干しにしてよし、あめ焼きにして更によし。元高知市長の河瀬さん、余生に毎日のハゼ釣り。白干しにして雑煮のだしにする。

この釣りはウナギと反対に舟を動くようにつなぎ、釣ることである。原が悪いのか餌が動かぬは食わん。ところが小さい魚のくせに俳句季語になつてゐる。晩秋だ。高浜虚子は来高して五台山の句碑

に「海底に珊瑚花咲く鯨を釣る」。今回で、釣りの秘訣シリーズは終わります。楽しいお便りを寄せていただいた浜田広信さん、本当にありがとうございました。

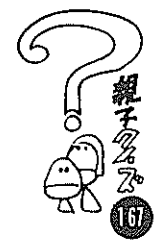
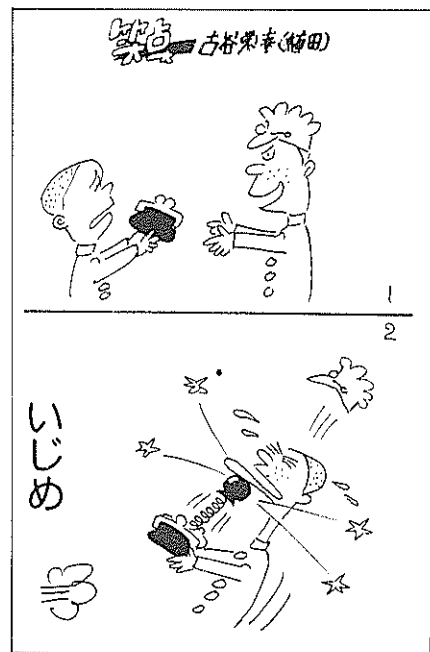
### 『地震対策講演会』

“地震を含む地質災害と郷土の体質”

—必要な常識と問題点—

甲藤次郎(高知大名誉教授)

とき・12月21日(土)午後1時~3時  
ところ・高知県庁正庁ホール



ご家庭で話し合つて答えてください。答えは、この広報に出ています。

●もんだい・第25回南国市展一般の部で、特選〇点選ばれました。

●しめきり・12月15日

●あて先・〒783 南国市大埔甲二三〇一 南国市役所内広報委員会親子クイズ係

●答えのハガキには必ず、住所氏名、年齢、職業を書いてください。

●賞品・正解者の中から、抽選で五人に図書券を進呈。

第166回当選者発表(敬称略)

(応募総数29通)

- 答え・〇人
- 当選者・五人
- 岡田光司(大地)
- 西山貴代(片山)
- 中村里実(前浜)
- 高島美知子(大地)
- 岩川真也(園分)